

研究報告

# 沖縄のキク圃場で問題となるクロゲハナアザミウマの発生状況と薬剤感受性および増殖能力

沖縄県農業研究センター 喜久村 智子  
 沖縄県八重山農林水産振興センター 貴島 圭介

## はじめに

亜熱帯気候に属する沖縄県では、冬でも温暖な気候を活かした観賞用のキクが盛んで、年間産出額が約70億円と全国2位の生産地となっている（農林水産省，2016）。本県の栽培は露地栽培が主体（9割以上）で、夜間に電照を行って花芽形成を遅らせ、おもに11～4月に出荷される（沖縄県農林水産部，2016）。栽培上最も問題となる害虫はアザミウマ類（アザミウマ目：アザミウマ科）で、葉に黒褐色の汚れを伴う白斑状被害（図-1）を引き起こし、品質を顕著に低下させる。長い間、これらの被害はおもに、ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* によるものであるとされていた（長嶺，1994）が、近年、筆者らがキクに発生するアザミウマの種構成を調査した結果、ミナミキイロアザミウマよりも

圧倒的に高い頻度でクロゲハナアザミウマ *Thrips nigropilosus*（口絵①）が発見され、最優占種であることが判明した（GANAHA-KIKUMURA et al., 2012；表-1）。本種は、キュウリやナス、レタス、スペアミント等様々な作物を加害することが知られているが、なかでもキクは好適な寄主として考えられており（SAKIMURA, 1939）、米国と英国ではキク（STANNARD, 1968；MOUND et al., 1976）、ケニアではシロバナムシヨケギク（BULLOCK, 1965）、日本の温帯地域ではキクとスイゼンジナの害虫として知られている（梅谷・岡田，2003；多々良ら，2008）。しかし、近年は害虫として問題視されたことがほとんどなかったため、防除に有用となる薬剤による防除効果や発育等の生態的特性に関する情報に乏しかった。このため、筆者らは本種の生態と防除に関する一連の研究を進めており、本稿では、現在までに得られている知見を紹介する。

## I 室内試験による各種薬剤の殺虫効果の評価

沖縄県のキクにおいてクロゲハナアザミウマが優占している理由として、GANAHA-KIKUMURA et al. (2012) は、本種が薬剤抵抗性を獲得している可能性を考えた。薬剤の効果に関する情報は、本種の防除技術を確立するための基礎となるが、こうした情報はごく限られており、スイゼンジナの栽培圃場において、スピノサドとエマメクチン安息香酸塩が本種に対して有効であることが知られている（多々良ら，2008）のみであった。そこで筆者らは、県内のキク圃場で発生している本種個体群を対象に、キクに適用のある18薬剤の殺虫効果を室内で調べた（喜久村ら，2014）。その結果を表-2に示す。供試した18剤のうち9剤が、雌成虫と幼虫の双方に高い殺虫効果を示し、その他の剤については、マラソンとチアメトキサムを除けば、雌成虫と幼虫のいずれかで中程度以上の殺虫効果が見られた。この結果は、ミナミキイロアザミウマの沖縄個体群では多くの薬剤の効果が高いという結果（喜久村ら，2015）と比べると対照的であり、クロゲハナアザミウマに対する薬剤の殺虫効果は総じて高いことが明らかになった。このため、本種が薬剤抵抗性を獲得している可能性は否定された。



図-1 クロゲハナアザミウマによるキクの葉の被害

Occurrence of *Thrips nigropilosus* in Okinawa Prefecture, its Pesticide Susceptibility, and Growth and Developmental Parameters. By Tomoko GANAHA-KIKUMURA and Keisuke KIJIMA

（キーワード：沖縄県，クロゲハナアザミウマ，種構成，農業，発育）